

「マルクスの新しい実在論」批判

「蝶の雑記帳 132」

このあいだまで新聞の書評を集めたサイトを見て書物を買うことが多かったが、近ごろそうすることがめっきり減った。歳をとったわたしの関心が、世代の若くなった書評者たちとずれてきたせいだと思われる。負け惜しみに、この人たちの関心は今の世にとって大事なことや人生の重大事には向かわないのか、とぼやいている。だが、旺盛な力を発揮して活躍する人たちの関心が、人生が残り少なくなった老夫と異なる方面へ向かうのは当たり前のことなのだろう。それにしても、今の世のあり方が、暮らし方においても精神のモチベーションにおいても、わたしが若くまだ先達たちから学ぼうとしていた時代とはちがった状況になった、と思わざるをえない。人の考え方は、世の状況とともに推移するから、長い年月が経てば人心は移る。年配の人のなかにも、時流に沿う関心事に注意が向かい当代流の考え方ができる人がいるけれども、わたしのような武骨者にはそれができない。骨が折れて時間のかかる仕事にとりくみそれを苦勞して書き物にする人が減ったのではないか、だから、読んでみようと思う書物が少なくなったのではないか、という疑念を棄てきれない。

1. ガブリエルの新しい実在論

今回の表題を耳目を集めるようなものにしたのは、孤独な蝶も、誰も読まないこの雑記帳を一人でも二人でも読む人が

現われることを願うからである。マルクスと呼んでいるのは姓がマルクスのあの高名な人のことではない。名がマルクスのガブリエルのことである。1980 年生まれのこちらの人も現代の世で注目されて高名な哲学者・思想家と聞いてはいた。やっと捨て置いてはいけないと考えて、すでに 2018 年に出版されていた日本語版『なぜ世界は存在しないのか』を今ごろになって読んでみる気を起こした。

この書物も人を挑発するような表題をもっているが、老夫の言語規範からすれば矛盾をはらむこの問いかけを、マルクス・ガブリエルはまじめにそう考えているようだ。これまで人間が考えてきたことや哲学で議論されてきたことをほとんどみな覆して、「世界は存在しない」という命題を論証して、新しい哲学的な存在論を組み立てようとしている。その回り道を通して実在を回復する立論は、日常生活で身近な出来事を例にとりながら能弁な語り方でなされる。老いた蝶は、その語り口を正確に聞きとっていくのに苦勞しながらなんとか読み終えた。この稿ではそれを書いてみよう。

序論は「哲学を新たに考える」と題されている。哲学を新たに考えるためにはわずかでも哲学史を眺める必要があると思うが、その労をとらずに短い文をいくつか重ねるだけで、重大な主張が示される。最初に「新しい哲学の原則を示して見せたい」と言うと、①「この哲学の出発点となる基本思想は、世界は存在しないということだ」と表明されるが、すぐ

に、②「およそ何も存在しないということではない」という註釈が加わる。

そこで「存在」するものの例として挙げられるものを見ると、夢、進化、水洗トイレ、脱毛症、さまざまな希望、素粒子、月面に棲む一角獣である。この例には、まず、日常会話で誰もが物質的に存在するものとして話す水洗トイレや脱毛症状が挙げられているが、科学者の言う素粒子も物質的なものに加えることができるだろう。夢や希望は人の心に現われて生きている人間には現実的なものであるが、死すべき人間にそれが「存在」と言うことに賛成しない人がいるだろう。「進化」ということばは抽象的な事象を表わすが、生物種を系統樹でとらえる見方では人間にとって現実的な意味をもつ。月面に棲む一角獣は想像で、それを「存在」と言うのに賛成しない人がいるだろう。よくよく考えれば、古代から人間は、自然言語で使う「存在」ということばを厳格に同じ概念として使ってきたのではないのである。だから古来哲学者が多様な意味をこめて「存在」を論じてきた。

そのことを思い起こせば、ガブリエルは、人によって異なる受けとめ方をする「存在」ということばに、独自の定義を与えているのである。そして、②は①を限定する拘束条件を与えるから、①に出る「世界」ということばにも独自の定義を与えていることになる。つまり、自然言語で用いることば「世界」と「存在」に、限定された独特の意味を付与しているのである。それは、哲学史のなかで特異な一つの立場を採

るということを意味する。

さて、上の段落で考えた文章の主旨は①と②に表わされているが、③「世界は存在しないという原則には、それ以外のすべてのものは存在していることが含意されている」と註釈を入れて、末尾でガブリエルが言い換えて結論するのは、④「わたしの主張によれば、あらゆるものが存在することになるが、——ただし世界は別である」という文である。

ここまでの文章は、縦書き八行の日本語文から成るが、そのなかには、存在するものとして夢～月面に棲む一角獣までを例として挙げる二行の文が含まれるから、その「存在するもの」の例示文を除けば、ガブリエルの主張は、六行足らずの文で構成されているのである。それを箇条書きにすれば、三つの文①・②・③と、それを複文で表現した④だけになる。結局この段落は①・②・③と④の四つの文から成るのだが、それらは、論理文として何事かを論証しているのではない。それらは、ガブリエルの用いる「世界」と「存在」ということばの定義を与えようとするもので、「新しい哲学の原則」と呼ぶのは適切ではない。ガブリエルの主張にすぎない。

＊

次の段落は「本書の第二の基本思想は、新しい実在論です」と始められるから、ガブリエルは、①～④は、「新しい哲学の原則」であり「本書の第一の基本思想」でもあると考えて

いるようだ。しかし、①～④は一般性をもちえる基本思想と呼べるものだろうか。

第二の基本思想「新しい実在論」がどのようなものかについて、次の段落は、⑤「ここで言う〈新しい実在論〉は、いわゆるポストモダン以後の時代を特徴づける哲学的立場を表わしています」と言う。「新しい実在論」は、ポストモダンの思想を乗り越えようとする「立場」なのだ。

続いてガブリエルが述べるのは、ポストモダン思想の総括である。そして、その総括は、⑥「（ポストモダン思潮の考えでは）、前史時代からずっと人類は巨大な集団幻覚の虜となっていた、そして形而上学こそが、その巨大な集団幻覚だった」とするごく簡単なものである。前史時代からの哲学史が、「形而上学」ということばに縮約されるのである。

そういうわけで、節を改めてからの議論は「形而上学」に焦点が合わされる。しかも、⑦「形而上学は、この世界全体についての理論を展開しようとする試みである」と定義され、⑧「形而上学が説明すべきことは、現実世界がどのように存在しているのかであって、わたしたちにとって世界がどのように見えるのか、わたしたちにたいして世界がどのように現われるかではありません」、と決めつける。しかし、哲学史上、哲学者は形而上学をさまざまに異なるやり方で議論したのではなかったか。本書の「形而上学」についてのこの断定は、根拠が示されないから、きつく言えば、ガブリエルの

独断的な見方だ、とわたしには思われる。

上の二つの文には同じことば「世界」が出るが、前者で全体ということばが限定する「世界全体」と後者に出る「世界」は異なるとされる。しかもその差異はきわめて重大とされる。

「世界」という概念を断絶させるこの切断にはずいぶん無理がある、とわたしは思う。このやり方では、一般性をもつ世界ということばを使うとき常に差異を考慮しなければならないことになる。

実際ガブリエルは、⑨「形而上学は、いわば初めて世界を発明したのでした」という言い方をするが、ここの世界ということばは、⑩「現実^⑩に成立していることがらの総体、言い換えれば、この現実それ自体」だとし、すぐ次で「この世界＝現実^⑩に成立していることがらの総体」と言い換える。つまり、ここの「世界」ということばは「世界全体」という意味だ、と主張するのである。これを用語の精密な使用ということではできない。さらに、⑪「この世界＝現実^⑩に成立していることがらの総体という等式から、わたしたち人間が抹消されている」と断定する。この断定から人間を回復するために、ガブリエルが出す結論が「この世界全体などというものは無い」という否定なのだろう。この書物の表題はそれを言明しているのだ。

しかし、ここの論理の運用には飛躍がある。古来の形而上学者が、形而上学とそれが考える世界から人間を抹消して考

えたわけではない、とわたしは考える。

註：岩波文庫『純粹理性批判』中巻は、「先驗的理性について」のところで、「一切の現象の絶対的全体というようなものは単なる理念にすぎない」と言い、「我々にかかる絶対的全体を決して具象的に考えることができない。従ってそれはいつまでたってもまったく解決できない問題」だと書いている。カントはすでに、ガブリエルが批判する「世界全体」という概念」をこのように規定しているのである。そして、カントの上の考えは、ガブリエルのいう「この世界＝現実」に成立していることがらの総体」に対しても当てはまり、「現実」に成立していることがらの総体」も具象的に考えることができない。従ってそれはいつまでたってもまったく解決できない問題」だということになるだろう。ガブリエルのカント批判は、その矛盾を理解していない。

たしかに、古い形而上学は、⑫「わたしたちにたいして現われているかぎりでの事物と、現実」に存在している事物それ自体とのあいだに区別がある」と考える傾向をもっていた。しかし、（一般的に使われる意味での）世界の見方としてエピクロスの原子論はそういう形而上学とは異なるだろう。従来の哲学を、上のように見なす「形而上学」だけに縮約してしまうガブリエルの考え方は単純すぎる、とわたしは思う。彼は、「存在」するもののなかに幻想を含めるから、宗教的

な想像なども存在に加えることになるけれども、既成の宗教は⑦のように考えるから、宗教的な思想はガブリエルの言う「形而上学」に含まれる。だから、ガブリエルは、⑫の考え方を論難するとき、宗教の考え方も論難することになる。それでいて、ガブリエルは、⑫の考え方を解体して幻想や宗教的な想像もみな存在に含めようとする。宗教的な思想を解体するのに、宗教的な心の働きは存在として迎え入れるのだろうか。

* *

ともかく、ガブリエルの思考を追ってみよう。上のように定式化した形而上学にたいしてポストモダンの思想は、⑬「わたしたちにたいして現われているかぎりでの事物だけが存在するのだ。現われの背後には、それ以上のもの、すなわち世界ないし現実そのものなど存在しない」、と異議を申し立てた、とガブリエルは言う（ポストモダンの思潮をひとくくりにするこの判定も単純すぎると思うが措いておこう）。

こう言うにおいて、彼は、⑭「このようなポストモダンとは、実のところ形而上学の派生形態のひとつにすぎません。言い換えれば、ポストモダンで問題になったのは、相当に一般化された形態をとった構築主義にほかなりません」、と判定する。こうして、「形而上学」を批判するガブリエルは、主要な論敵が「構築主義」であることを表明する。

彼の言う「構築主義」とは、⑮「およそ事実それ自体など

存在しない。むしろわたしたちが、わたしたち自身の重層的な言説ないし科学的方法を通じて、いっさいの事実を構築しているのだ」と想定する考え方である。

続けて、「このような思想の最も重要な証言者が、イマヌエル・カントです」と言うにおいて、⑩「カントが主張したのは、それ自体として存在するような世界は、わたしたちには認識できないということでした」、と断定する。さらに重ねて、カントが主張したのは、⑪「わたしたちが何を認識するのであれ、およそ認識されるものは何らかの仕方で人間の作為を加えられているほかない」ということだ、と断定する。

ガブリエルという人は率直な物言いをする人のように見える。その反面、論理の運用に少しずつ飛躍があるとわたしには見える。この書物では殊に、対決すべき考え方を、明確にしようとするのに性急すぎて正確に言い表わしていない、と思う。

ポストモダンの思潮をわずかにかじってみたわたしは、たしかにその思潮は、ガブリエルのような率直な思考をせずに、詩的な文章を多用してそれを書いている本人がほんとうはどのように考えているかがあいまいなものだ、と思う。しかし、その思潮を「構築主義」と呼んで⑫を想定していると断定することには躊躇する。仮にそうするとしても、ポストモダンの思潮がカントの思想と大きく重なるとする見方は的外れで、肯定することはできない。

次節で論じるが、たしかにカントは「モノ」自体を認識することができない（モノの認識は完結しない）」と考えた。しかし、カントは、自分のことを「経験的實在論者だ」と言っているのである。⑮のように「事実それ自体が存在しない」と考えたのではない。カントは、「それ自体として存在するような世界」を論じない。人間の感性・悟性・理性から成る思考能力ではそんなことを論じることができないと考えるから、「認識論」の枠内でそんなことを論じないのである。⑮から⑯への移行には論理の飛躍がある。カントの『純粹理性批判』と「認識論」が現代の思潮からすると難解だとしても、⑰のような結論を抽出するのはおかしい。そのことはあとで議論しよう。

そう考えてみれば、現実には、ガブリエルはこれまでの知られた哲学全体を敵にまわす、全面的な議論をしていると見てはいけないのだろう。カントのことを切り離せば、ガブリエルが対決しようとしている「形而上学」と「構築主義」とは、20世紀後半のガブリエルたちより前の世代で主流だった思想と限定してとらえたほうがよいだろう。

実際、訳者あとがきがそういう見方を提示している。訳者は、「新しい實在論」を唱える論者たちがいわゆる「ポストモダン」思想を批判している、と見ている。そして、「ポストモダン以後の新たな哲学的態度として企図された〈新しい實在論〉は、本書では、〈形而上学〉と〈構築主義〉をとと

もに批判するなかでスケッチされていく」と要約している。その際、「論敵の単純化・矮小化は否めない」と註釈している点は見逃せない。

ガブリエルが言い換えているところを書きとめてみよう。⑱「形而上学は現実を観察者のいない世界として一面的に解し」、⑲「構築主義は現実を観察者にとってだけの世界として同じく一面的に解する」として、「いずれも十分な根拠なしに現実を単純化している」と断定している。その上で、⑳「わたしの知っている世界は、つねに観察者のいる世界です」と言って、論難する。ここでガブリエルは「論敵の主張を単純化・矮小化している」、とわたしも思う。

立論において、「形而上学」的な主張をする哲学者にしても、「構築主義」的な主張をする哲学者にしても、原理主義者でない限り、「わたしの知っている世界は、つねに観察者のいる世界です」という言明に反対する人はいないだろう。おおまかに言えば、哲学の徒は、古くからの哲学の伝統に則って、形而上学的な見方と構築主義的な見方のどちらが哲学理論としてより原理的であるかあるいはより本質的であるかと議論しているのだ。それを、㉑「新しい實在論が想定するのは、わたしたちの思考対象となるさまざまな事実が現実存在しているのはもちろん、それと同じ権利で、それらの事実についての私たちの思考も現実存在している、ということです」と単純化して言明するだけで、古くからの考え方

を止揚する「新しい実在論」ということにはならないだろう。

⑪のような思考をまったくしない人間がいるだろうか。

哲学の歴史で両端には対立的な考え方があったというのは真実だろう。けれども、両者の積極面を容認するだけでその理論的な対立が解消すると考えるのは、単純すぎるだろう。哲学者のめざしてきたことは、根本的な原理から出発して自己無撞着な理論をつくり上げることだった。「新しい実在論」は、二者を折衷した第三の原理を十分な根拠を挙げて提出している、と言えるだろうか。厳格な論証を求める哲学でそれが困難だったから、今もまだ“新しい実在論”が必要だと考えられるのではないか。わたしの疑問は解消しない。

ここまで考えてきたことはこの書物の入り口に過ぎず、ガブリエルの書物に対する批判はさらに続けなければ完結しない。それでも、ガブリエルの基本的な考え方に対する批判を含んでいる、と思う。今のわたしに全面的な批判を遂行するゆとりはないので、ここで中断する。代わりに、わたしのカント理解を示してガブリエル批判としよう。

2. カントの認識論が提示する実在論

ガブリエルのカント理解は、先ほどの⑩「カントが主張したのは、それ自体として存在するような世界は、わたしたちには認識できないということでした」と、⑪「わたしたちが何を認識するのであれ、およそ認識されるものは何らかの仕

方で人間の作為を加えられているほかない」というものだという判断に要約されている。それに対して、ガブリエルは、②①「新しい実在論が想定するのは、わたしたちの思考対象となるさまざまな事実が現実存在しているのはもちろん、それと同じ権利で、それらの事実についての私たちの思考も現実存在している、ということです」と言う。

カントは、認識について、②⑥ほどの極論を説いていないし、②⑦のような「人間の作為」を主張してはいない、とわたしは考える。ガブリエルの言明②①を経験を尊重する常識の範囲で肯定することができる、とさえ考える。カントも同様だろう。しかしカントは、認識について考察するのに、その深さで留まることをせず、どこまでも深く探求して議論したのだ。だから老生は、ガブリエルがそこまで降りて行ってさまざまに考えることを願う。

②⑥・②⑦と断定するガブリエルは、『なぜ世界は存在しないのか』に一つだけカントの文章を引用している。日本語版 176 ページのその翻訳文を孫引きして、ほんとうに②⑥・②⑦と断定してよいか考えてみよう。

A

したがって我々が言いたかったのは、およそ我々の直感とは現象についての表象②④にほかならないということであるつまり我々が直感する事物は、それ自体としては

我々が直感しているとおりのものではないし、さまざまな事物の関係も、それ自体としては我々にとって現象しているのと同じ在り方をしているわけではない。したがって我々という主体を取り除いてしまうか、あるいは我々の感覚という主観的性質^⑨だけでも取り除いてしまえば、客体が空間・時間のなかでもっているあらゆる性質や関係は消えてしまうだろうし^⑩、そればかりか空間・時間それ自体すらも消えてしまうだろう^⑪。それらの一切は現象であって、それ自体として存在するのではなく、ただ我々のなかにだけ存在する^⑫からである。

この文章は、『純粹理性批判』を引用するときの慣例にしたがえば初版と第二版のページ番号 A42/B59 に出るという。インターネットを覗くと、カントの「物自体は認識できない」とする考えを考察する哲学者たちの論文が、みなこの文章を問題にしていることが分かる。ガブリエルもそうしているのである。そして彼の書物では、⑩の判定を下す論拠としてこの文章しか挙げられていない。

Aに引用した文章は訳者清水一浩の日本語訳なのだろう。それを、岩波文庫版『純粹理性批判』の文章と対照させてみよう。篠田英雄訳の岩波文庫本は 1961 年に出版されているから訳文は古い。しかし、内容について深い読み込みがなされていて信頼がおけるので、カントの言っていることをよく

理解するのに役立つと思う。

B

感性的認識に関して生じる誤解を一掃するためには、感性的認識一般の根本的性質に関する我々の見解をできるだけ明らかにすることが、何よりも必要であると思う（下線と強調記号「・」はわたしがつけたもの）。

これまで我々が主張してきたことは次の諸点に帰着する、——我々の一切の直感は、現象を表象する仕方^④にほかならない、——我々が直感するところの物はそれ自体としては、我々が実際に直感しているところのものと同じものではない、また物相互の関係もそれ自体としては、これらの関係が我々に現われるのと同じようなものではない、——またもし我々の主観を除き去るならば、或いは我々の感性一般の主観的性質^⑤だけでも除き去るならば、空間および時間そのものすら消失するであろう^⑥、またかかる性質や関係は現象であるから、それ自体存在するものではなくて、我々のうちにのみ存し得る^⑦、ということである。

AをBとくらべると、④～⑦の部分で異なることが分かる。Aにある⑥「あらゆる性質や関係は消えてしまう」という見解は、Bに現われない。④について、Aの「直感とは現象についての表象」という規定は、Bの「直感とは現象を表象する

仕方」と明らかに異なる。「直感」は「働き」であって、獲得された「表象」とは異なるのである。Bのように「直感は現象を表象する仕方」と規定する方がよい。Aの文章は、ひょっとすると、『純粹理性批判』のドイツ語文そのものではなくて、ガブリエルの書き換えなのだろうか。Aの文章からなら、⑯のような判定が導きやすい。

上の文章を正しく考えるには、『純粹理性批判』の構成をおさえておく必要がある。その大部の書物は、岩波文庫版で次のように構成されている。分量が分かるように文庫本のページ数を添えておこう。

第一版序文	13
第二版序文	25
諸言	57
I 先験的原理論	86
第一部門「先験的感性論」	86
第二部門「先験的論理学」	123
第一部 先験的分析論	139
第二部 先験的弁証論	中巻約 340 ページ
II 先験的方法論	下巻の約 130 ページ

下巻には 100 ページ余りの付録と、
187 ページの事項索引が含まれる

B の文章は、I 先験的原理論の第一部門「先験的感性論」を論述したあとに加えられた 12 ページの「先験的感性論に

対する一般的注」の先頭の段落の冒頭部分である。その文章を正確に読みとるには、最低限その段落全体を読む必要がある。長くなるけれども、それを篠田英雄訳で引用しよう。

Bの続き

対象が、我々のこの受容性から引き離された場合に、それ自体としてどのようなものであるかはわれわれには遂に知られない、我々が知っているのは、対象を知覚する仕方だけである。この仕方は我々に特有であり、それは人間にこそ例外なく存するに違いないにせよ、しかし人間以外の存在者にも必ず存するとは限らない。そして我々が問題にするのは、もっぱらこのような仕方だけである。空間および時間は、対象を知覚するかかる仕方の純粹形式であり、感覚一般はその質料である。我々がア・プリオリに——換言すれば、一切の現実的知覚よりも前に認識し得るのは、空間および時間だけである。それだから空間および時間は純粹直感と呼ばれるのである。これに反して感覚は我々の認識において、ア・ポステリオリな認識即ち經驗的直観と呼ばれる。空間および時間は、我々の感覚がどのようなものであるにせよ、我々の感性そのものに絶対に、また必然的に付属するものである。しかし我々の感覚は甚だしく異なることがあり得る。我々が、我々のこの直感を極度に判明にし得たからとて、我々はそれによって、対象自体をそれだけよく知りえるというわけではない。

我々が完全に認識し得るのは、我々の直感の仕方、換言すれば我々の感性だけであり、しかもこの認識はもともと主観に付属するところの空間および時間という条件のもとでのみ可能である。われわれに与えられているのは、対象自体ではなくてこの対象の[現われであるところの]現象だけである。対象自体がどのようなものであるにせよ、対象の現象をいかに明晰に認識したところで、対象自体は我々に知られないであらう。

Bを含む段落全体を読めば、カントの考えがガブリエルの言う「構築主義」ではないし、カントの考えについて⑩や⑪のような断定を下すのが早計であることが判る。ガブリエルは、Aの文を引用する前で、「カントは、物それ自体は空間・時間のなかにはありえないという不条理な結論に至りました」と書いているが、Bおよび続く文章のどこにもそのような結論は述べられていない。

ガブリエルがカントをとらえそこねるのは、認識という問題を考えるのに、⑫のような平板な考え方しかないからである。岩波文庫本上巻を視野におさめて、Bとそれに続く文章を読めば、カントが考えを進めるのに、用語を分節的に定義・説明しながら、それを組み立てて構造的なとらえ方をしようとしていることが判る。自然言語を用いて考察を始めるとき、既存の用語で始めることしかできないが、質料と形式というような一般に認められてきた概念分けは無効な

わけではない。

そこで、空間と時間を形式と呼び感覚は質料として論理文を構成する仕方は認められてしかるべきである。そして、空間と時間が人間が感覚するとき必然的に伴われるのに対して、具体的な感覚が経験的であることもまぎれもない事実である。……こうして人間は、感覚器官によって対象を直感するという言葉方をして、対象の感性的認識が始まるとカントは表現しているのである。ガブリエルが見逃しているのは、ここでは人間の感性と直感が考えられていて、悟性と理性まで含めた認識活動の全過程ではなく、感性的な認識だけが問題にされていることである。

感性的認識についてカントが言っていることに耳を澄ましてみよう。そうすると、対象・感性・受容性・知覚・感覚などが生きている人間に存することをカントが疑っていないことは明らかである。人間存在と対象の存在は考察の出発点にあるのだ。しかも、それらを抽象的な観念とするのではなく、現実に存在するものと考えているのだ。「人間が抹消されている」どころではなく、人間の感性をほんとうに具体的に存するものとしてその働きを知ろうとしている。

ガブリエルのカント理解はまったく軽率だと言わざるをえない。

＊

カントの『純粋理性批判』上巻で提起される認識論は、ガ

ブリエルの平板な考え方を突き抜けて、人間の認識つまり思考を徹底的に解明し、ひいては、超越論的構えのなかで対象と人間自身をもっと深く知ろうとする理論だ、とわたしは考える。以下、それをことばにする努力をしてみよう。

門外の小僧が言うのもおこがましいが、21 世紀になっても、今言いかけたカントの認識論の構えあるいは枠組みがよく理解されていないように、わたしは思う。カントは、デカルトが「懐疑」を徹底させてたどりついた「考えているわたし」を最大限尊重しながら、そのわたしが対面している「延長」という属性をもつ対象を認識する活動を理解しようとする。そのとき、カントは、デカルトのように「延長」という属性をもつ対象と、それを認識しようとする「精神」を独立な二元とするのではなく、対象と認識主体が不可分に相対する統合的な構図を超越論的に見ることができるようになるのである。「超越論的」ということばは、対象と認識主体を外から観察できると前提するのを避けるための工夫である。

出発点では、人間の認識能力が対象を物自体としてどこまで知ることができるかも前提されていない。なぜなら、カントは、対象の認識は、現実に存在する人間の感覚器官が対象と具体的に相互作用することによって始まる、と考えるからである。そのとき、感覚がどこまでのことを為しえるかも検討しなければならないからである。こういう認識論のどこに、

人間と切り離された対象から成る「世界全体」とか、対象世界の把握はまったく人間の構成するものにすぎないとかする考え方があるだろうか。カントは、世界について人間が現実達成する認識が真であるかどうかは経験によって確認される、とする。現実の対象認識は徹底して実在を離れずになされる、と考えているのである。

そうやって、カントの「対象と認識主体の切り離せない世界を超越論的に認識しようとする構え」は、デカルトの二元論、スピノザの“一元論”、経験論や懐疑論を超える哲学をめざすことができるのである。ガブリエルたちの「新しい実在論」には、この哲学史の骨格の把握が希薄だ、と思う。

ついでに言えば、メイヤスを旗手とする「思弁的実在論」者たちも、現代哲学の論者たちの多くに見られる観念論に対抗してある種の実在論を擁護しているが、やはりカントの認識論の構えに対する理解が希薄だ、と思う。さらに言えば、人新生の時代を批判する脱成長論の旗手の一人 J. ヒッケルが、現代の思潮をデカルト的二元論だと批判するのを聞くと、そこでも、カントが画期的に前進させた認識論の理解が足りない、とわたしは思う。

カントの世界と人間の理解をめざす哲学は、人間の認識と思考自体を批判しながらことごと用いる概念を磨いて、総合的に対象を認識し人間を考え続けていけるような理論的構えを提起するのである。

その基礎理論が認識論である。それを、ガブリエルやメイヤスーのように人間中心主義で実在を疎んじるととらえるのは正しくない。彼らのもの言いの水準で言えば、自らを経験的実在論者と呼ぶカントは立派な実在論者なのである。ただ、人間の理性はどこまでも考察を続けようとするが、理由づけをどこまでもさかのぼることはできず、つまり人間の認識は有限であって、対象のすべて・存在するもののすべて・世界全体を認識し尽くすことはできない、とカントは考えるのである。だから、“新しい実在論者”のような事物事象についての断言をしないのである。

カントは、人間の認識能力を感性・悟性・理性という三つの役割に分けて、それらの働きを多面的・段階的にとらえようとする。そして、人間の認識の始まりが感覚器官を用いる感性にあると考える。感性が認識の初動にあることを誰も否定できないだろう。上のBの文章は、その初動にある感性の、経験に先立って人間に具わる働きを考察した「先験的感性論に対する一般的注」にあるのである。ガブリエルは、Bの文章は人間の認識全般について論述しているのでないことに注意が足りない。感覚器官を用いる感性の働きが物自体を捉えきるものでないことを、わたしなりに解釈してみよう。

月が地球のまわりを廻るあるいはリンゴが木から落ちる出来事を、初めて目撃する人間になったつもりで考えてみよ

う。月やリングは、——経験をつんだあとにことばで表現できるようにするのだが——、「空間にあって時間とともに移動する」と知覚するとき、月やリングについていったいどれだけのことを知ったのだろうか。月やリングが何かだれも確信をもって言うことはできないだろう。そして、月やリングが地球と引力で引きあっていることを、感覚器官だけで知ることにはできない。カントは、こういう事情を根源的に考察した上で、「感性が物自体を完全に知ることにはできない」と言っているのだ。また、感性だけで月と地球という二つの「物の関係を完全に知ることにはできない」。だからカントは、「人間は、感性によって、物自体と物のあいだにある関係そのものを完全に知ることができない」と判断するのである。根源的に考えると、人間が感性によってとらえたと思う出来事が事実ほんとうに対象に起きているとする絶対的な保証はないということである。だからカントは、感性が観察する出来事を「現象」と表現して、対象自身に起きていることと区別しておこうとするのである。

このことをもう少し具体的に表現してみよう。視覚だけで、リングが何かなぜ枝から離れると地面に落ちるかを認識することはできない。リングを手にもって触感を得て、香りを嗅いで、かぶってみて味を知って、リングについての認識が深まる。かじって分解すれば、リングが異なる部分から構成されていることも知るのである。結局、そういう経験を重ね

てリングとは何かをしだいに知ることができる、ということである。現代人は、リングの化学的組成まで科学者に聞いて知っているから、常識的に言えばリングをよく知っていると思うのである。

さらに現代物理学の知識を借りて、リングはその下の階層にある分子や原子、さらに陽子や電子から成ると言って、知っているつもりでいる。しかし、われわれは陽子や電子が何か物自体と言えるほど知っているだろうか。陽子・中性子・電子から成る原子から出る光についてどれだけのことを知っているか、自分に聞いてみれば事態が明らかになる。光とは電磁波であり光子であると言って知っているつもりでも、光とは何か問われたら、現代物理学が到達した知見をつぎつぎに述べるほかに手はない。つまり、光がそもそも何か端的に言うことができないということである。根源的に考えるカントなら、わたしは光自体が何かまだ知らないところがある、と言うだろう。

ところで、化学や物理学は人間の感覚器官だけを用いて事物事象を探求して知見を得るのではない。自然科学は、悟性とさらに理性を働かせて法則の発見に至るが、法則が正しいと判定するのは、あらかじめ予測理論を構成し観測装置を組み立て事物事象が法則通りに起きるかを観察して、法則を組み立てている概念とその関係が正しいと確認するのである。その確認は、人間の感性だけで行なわれるのではない。感性・

悟性・理性を総合して、法則と呼ばれる理論を組み立て、その法則にしたがって起きるはずの事象を観察して結論するのである。現代人が自然科学的物事を知っていると言うのは、そういう手続き全体が法則の“正しさ”を保証するからである。科学者はしばしばそのことを忘れて事物それ自体と関係を含めた事象をほんとうに知っているかのように語るが、上に述べたことが事の真相である。だから、カブリエルが人は物自体を知ると断定するのは、事物事象をここまで根源的に考えたときには正しくない。

カントは、生き物である人間の認識が世界全体をとらえきることができないことを知っているのである。自然科学者は宇宙のことを話すが、その知見はいつも途上にある。ガブリエルは、そのことをよくわきまえずに科学者を批判している。だから、哲学者が考えようとしている世界は、もちろん多くの科学者が語る宇宙とは異なるかもしれないと考えなければいけないだろう。世界は、人間の認識能力では知りえないだろうが、人間が対峙して生きる対象としてある。

しかし、人間を対象世界から切り離して、逆に人間を切り離して対象世界を思考することは、人間にはできない。カントの認識理論の構えはそういうことを規定している。人間にできることはその認識理論の構えのなかで思考することである。対象世界と認識主体の人間を外から超越的に観察する能力を人間はもたない。

けれども、人間が生きるとき、感性によって関係を取りむすび悟性と理性を働かせて経験的に認識を深めることのできる対象だけが人間にあるのではない。人間理性は、本性的にそれを超えて自分に思考可能なすべてのことを考えようとする。人間にはそういう途方もない“世界”が自分の前にある。

付記

『山本義隆自選論集Ⅰ 物理学の誕生』（ちくま学芸文庫）を読んでいて、「2. 近代的自然観の形成」で、ニュートンが成し遂げたことに関して、「物理学はものの〈本質〉は何であるかを問うという意味の存在論をひとたびは追放したのです」という文章に出会った。この文章が言う「ものの本質」はカントの言う「物自体」につながる、とわたしは考える。そのことについてごく簡略に記しておこう。

ニュートンの運動の法則と万有引力の発見は、近代自然科学を開始させたが、ニュートン力学は「ものの本質は何であるか」を明らかにしたのではないということである。「月や地球が本質的に何からできているか」という問いに、現代の知識からは、膨大な種類の分子や原子からできていると回答することになるだろう。しかしその回答で、ものの本質は何かを説明したことになるだろうか。分子や原子から成る一括

りの集合である地球と月の本質は何かともう一度問われれば、分子や原子がどのように構成され、さらにそれらがどのように集合して地球や月となっているかを説明することしかできない。

分子や原子を詳細に説明するとすれば、たとえば、最も単純な分子である水素分子は2個の水素原子が相互作用してある構造を形づくっている、要素である水素原子は電気力を相互に及ぼして電子が陽子のまわりを運動するように構成されている、と答えることになるだろう。地球のまわりを周回する月の運動を記述する運動方程式はニュートンの運動方程式で、相互作用は万有引力であるのに対し、陽子のまわりの電子の運動を記述する運動方程式は、量子力学のシュレーディンガー方程式で相互作用は電氣的な力である。二つの運動は質的に異なるけれども、両者は翻訳照合することもできないほどかけ離れているのではない。角運動量などの基本的な物理量を介して対応させて理解できないわけではない。重要な点は、水素原子をきっちりと説明できても、その説明は地球と月が相互作用する運動の説明と同様な水準にあるということである（太陽系についても同様である）。水素原子は陽子のまわりを電子が運動する構成体だと正確に説明できるが、陽子と電子がそもそも何か、すなわち「水素原子というものの本質は何か」を明らかにしはしないのである。

この論理構造は、物質の階層で原子よりもさらに下に位置する陽子に立ち入っても同様である。つまり、物質を次々に

微細な階層にまで分け入っても、「ものの〈本質〉は何であるかを問うという意味の存在論」の核心に到達できないのである。ガブリエルはこのことを理解できていない、と言っては言い過ぎだろうか。

カントの時代に確実な自然科学としてほとんどニュートンの力学ぐらいしかなかったが、「力学はものの〈本質〉は何であるかを問うという意味の存在論」に答えていないことが、カントには判っていたのだと思う。そして、人間の感性・悟性・理性の能力を根源的に考察したうえで、人間精神の認識という働きは「ものの〈本質〉は何であるかを問うという意味の存在論」に至らない、すなわちカントの言い方では「物自体は知られない」と判断したのだ、とわたしは思う。それが、『純粋理性批判』で最重要なカントの認識論である。

ガブリエルだけでなく現代の多くの哲学者は、現代自然科学の到達点をこれとはちがうように理解しているようだ。ここで言添えておかなければいけないのは、自然科学は、認識者である人間が生きて経験している場——そこで人間が認識しようとしている未規定だが可能な認識対象全体を人間は世界と呼ぶ——でのみ、その確実性をうんぬんすることができるということである。自然科学においてなされる判断は、月面に棲む一角獣についての想像とは異なる。そして、根源的に考えれば、人間の哲学も、認識者である人間が生きて経験している場でのみ意味をもつ、とわたしは思う。

とり急ぎの雑な感想を付記したが、もっと考える必要があるだろう。

2024 年 12 月冬至

海蝶 谷川修

